

名工の技と道具 40 大形建築を支える鉄骨職人

ホテルや病院、工場などの高層建築、大空間建築物は柱や梁を「鉄骨」という部材で構成し支えられている。近年、建物は大規模化し、そこに使われる鉄骨の製作には高度な技術が要求される。

株式会社アイセツの土井大介さんは建築鉄骨を製作する若手職人で、同社の工場において、加工用の原寸図作成をはじめ溶接、切断などの鍛冶加工、産業用ロボットのオペレーション、工程管理や品質管理まで鉄骨製作に必要な工程を全て行う。大形鉄骨の製作は、気温や溶接時の熱などによる金属の伸縮の影響が大きく出るため、単純な図面どおりでは狙った寸法を出すことが難しいという。土井さんは経験や勘だけではなく、季節や気温、作業内容による結果などをノートに蓄積しデータとして活用することで、現場全体へのフィードバックを行う。また現場で安全かつ効率的に工程を進めるために考え出される道具である「治具」も土井さんのアイデアや手仕事によるものが多く使われている。これも工場全体の工程を把握し常に工夫や改善を考えているからこそである。

土井さんは現在、新人の外国人エンジニアへの指導を行うとともに、自身も鉄骨製作管理に関する資格や検定に挑戦し続けている。

株式会社アイセツ

所在地：豊橋市西幸町字東脇 145 番地

電話：0532-26-8854



土井さんがつくる巨大な鉄骨の梁

【写真右】溶接作業
【写真上】土井大介さん



土井さんのつくった治具の1つ。切断時に落下する金属片から足を守るとともに回収しやすくした。



CONTENTS

NEWS CENTER 1
 東三河懇話会のニュース・地域のニュース

SALOON REPORT 2
 東三河懇話会講演録
 第430回 東三河産学官交流サロン—令和2年8月19日開催—
 山田 邦明氏『戦国時代の豊橋』
 鈴木 寿明氏『未来(あす)の蒲郡に向けて』
 第204回 東三河午さん交流会—令和2年8月7日開催—
 藤田 佳久氏『豊川の霞堤—今も生きる伝統的治水システム—』
 第205回 東三河午さん交流会—令和2年9月4日開催—
 仲井 雅弘氏『才能を育てる』

会員関係者の動静、伝言板 10

表紙写真：名工の技と道具40 土井 大介氏
 【文・写真】柘植 芳之氏（愛知県立豊橋工業高等学校）
 【監修】 石田 正治氏（名古屋芸術大学非常勤講師）

「とよしん」は、ずっとこの街といっしょです。

おたくも うちも
豊橋信用金庫
 ☎(0532)52-0321(代) <https://www.toyo-shin.co.jp>

<https://www.arcriche.jp/>

優雅なひとときを
 過ごす空間がここに

HOTEL ARC RICHE TOYOHASHI
 ホテルアーケリッシュ豊橋
 〒440-0888 愛知県豊橋市駅前大通1-55
 TEL.0532-51-1111

生活にフラインクオリティ
sala 中部ガス不動産株式会社

不動産仲介
 鑑定評価 アパート・マンション・ビル
 管理
 不動産賃貸
 不動産分譲 まちづくり・再開発

【お問い合わせ】
 〒440-0881 豊橋市広小路3丁目91 本社 tel.0532-51-5800
<http://www.cgf.sala.jp/>

団体生活介護保険

太陽生命保険株式会社
 中部法人営業部

〒460-0003
 名古屋市中区錦3-6-34
 052-962-4741 (代表)

NEWS CENTER

令和2年度

三河港関連事業計画等説明会及び 東三河地区幹線道路整備計画に関する説明会開催

■東三河懇話会／三河港振興

8月28日(金)午後1時半より、三河港関連事業計画等説明会がライフポートとよはしコンサートホールにて開催された。参加者は約100名。

令和2年度三河港関連事業計画の概要について、国土交通省中部地方整備局三河港湾事務所長の山口隼人氏、愛知県三河港事務所長の白村暁氏、愛知県三河港工事事務所長の渡邊浩文氏がそれぞれ説明された。

また、東三河地区幹線道路整備計画に関する説明会は、9月10日(木)午後1時半よりライフポートとよはしコンサートホールにて開催され、約150名が参加した。

国土交通省中部地方整備局名四国道事務所長の永田耕之氏、同局浜松河川国道事務所長の吉田敏章氏、同局設楽ダム工事事務所長の真鍋将一氏、愛知県東三河建設事務所長の中尾恭啓氏、愛知県新城設楽建設事務所長の城戸毅氏が、それぞれが所管する幹線道路整備計画並びに進捗状況について説明された。



第430回・第431回 東三河産学官交流サロン開催

■東三河懇話会／(公社)東三河地域研究センター

第430回東三河産学官交流サロンが、8月19日(水)午後6時よりホテルアークリッシュ豊橋5階ザ・グレイスにて開催され、74名が参加した。愛知大学文学部長・教授の山田邦明氏が『戦国時代の豊橋』、蒲郡市長の鈴木寿明氏が『未来(あす)の蒲郡に向けて』をテーマに講演された。(講演内容は本号に掲載)

第431回は、9月16日(水)午後6時よりホテルアークリッシュ豊橋5階ザ・グレイスにて開催された。参加者は68名。本年4月に学長に就任された豊橋技術科学大学の寺嶋一彦氏が、『地域と連携した技科大のこれからの産学官金共同研究・教育と国際展開』をテーマに講演された。(講演内容は次号掲載予定)



第205回・第206回 東三河午さん交流会開催

■東三河懇話会／(公社)東三河地域研究センター

第205回東三河午さん交流会が、9月4日(金)午前11時半よりホテルアークリッシュ豊橋4階テラスルームにて開催され、37名が参加した。NPO法人TTRunners 理事長の仲井雅弘氏が、『才能を育てる』をテーマに講演された。(講演内容は本号に掲載)

第206回は、10月2日(金)午前11時半よりホテルアークリッシュ豊橋4階テラスルームにて開催され、34名が参加した。講師に豊橋総合動植物公園動植物園長で獣医師・農学博士の高見一利氏をお招きし、『動物園は必要ですか?』をテーマに講演された。(講演内容は次号掲載予定)



「戦国時代の豊橋」

愛知大学 文学部長・教授 山田 邦明氏



●はじめに

本日皆さんにお伝えしたいことは、「豊橋は都会」ということである。古代から中世、そして明治以降も都会であった。豊橋といっても駅前ではなく、今の市役所周辺のことである。今の名古屋は大会だが、昔は清須の方が都会であった。岡崎市は八丁味噌で栄えた矢作川近辺、知立市は八橋が栄えており、いずれも現在の中心地とは少しくずれている。ところが豊橋は古代から今に至るまでずっと市役所周辺が中心地で、特別な地域といえるだろう。考えてみると、中心が駅前に移っている今が一番田舎になっているかもしれない。

●戦国以前の豊橋

豊橋は明治以降の地名で、昔は吉田、その前は今橋だったと言われているが、一番古い地名は飽海（あくみ）である。渥美半島の渥美は、元々は飽海であった。以前は伊良湖の近辺が渥美郡渥美町だったため、渥美というイメージされるかもしれないが、渥美の中心は実は豊橋であった。そもそも飽海という地名は豊橋市役所の東の辺りを指していて、これが郡の名前の出発点であった。その証拠に、渥美郡はもともと飽海郡といい、豊川（とよがわ）は飽海川とよばれていた。飽海（渥美）は、渥美町ではなく豊橋市だったということを是非覚えていただきたい。

次に、伊勢神宮の所領「飽海神戸」（あくみかんべ）が設定される。飽海神戸は第2神戸で、第1神戸は田原市神戸町、第3神戸は豊橋市老津町である。つまり伊勢神宮の土地が三河国に最初にできたのが田原の神戸、2番目にできたのが豊橋市役所近辺の今の安久美神戸神明社の所だということだ。安久美神戸神明社とは、飽海の神戸にある神明社という大事な名前である。次にできたのが「吉田御園」という荘園で、吉田神社とその南にあたる。神戸は神宮の一番重要な荘園で、御園はそれに次ぐものだ。あの狭い地域の東に安久美神戸神明社、西に吉田神社という大神社が並んでいるのは大変なことである。余談だが、天皇家につながる伊勢系の神明社と、スサノオノミコトとかかわる牛頭信仰の神社が並んでいるとは見事なものである。このような形で豊橋は出発していく。

豊橋が都会になった決定的な理由は、交通路にある。東海道が通る陸上交通の要所で、船で来ることもできる

見事な土地に位置していた。室町時代になると、恐らく橋が造られて今橋という地名ができ、この辺りは今橋と呼ばれるようになった。永享4年（1432年）には、室町幕府の将軍足利義教の一行が、富士山を見るために東海道を旅する途中、「今橋宿」に泊まったという記録がある。「宿」と書かれていることから、ただの交通路ではなく宿場になっていたことが分かる。

●戦国時代—今橋城—

戦国時代に今の吉田城が築かれた。もともとは何もない崖だったが、目の前は川で、田はないため生産力はないが要害堅固で、そこに目を付けた牧野古白が今橋城を築いたと言われている。戦国時代の初めである。

明応6年（1497年）には、安久美神戸神明社が造営され、牧野古白と地域住民が馬を寄進した。大事なことは神社が造られたことで、これには大変な費用がかかる。スポンサーについては、安久美神戸神明社にある棟札にみえ、牧野古白が馬一頭を寄進したと書いてある。ところが、地域の住民も馬を寄進している。この時期には地域住民がレベルアップしていて、皆で団結して共同体を作り、馬一頭を寄進している。

今橋城は、16世紀初頭には居城が造られて繁栄するが、都会であるため皆が欲しがった。永正3年（1506年）に駿河の今川氏の軍勢が今橋城に攻め入り、9月19日に端城を乗っ取り、11月3日に牧野古白は討ち死にして城が陥落する。今川の軍勢に対して約3ヵ月頑張ったことは注目すべきである。牧野一族は只者ではなく、一度は負けても絶対に滅びず、状況が変わると逃げ延びた一族がまた今橋を回復して城主となっている。古白の孫の牧野信成の代にわが世の春を迎え、今橋城を拠点に栄える時代が始まる。

牧野氏は牛久保（豊川市）を拠点としていたが、もともとは豊橋にいたのではないかと私は思っている。豊川（とよがわ）の東も西も牧野氏の世界であったが、田原の戸田氏が攻めてくる。戸田氏は強く、牧野氏は弱い。負けた牧野氏は牛久保を拠点にする。そして戸田氏が入り込んでくる。まとめると、まず今橋を牧野が取って、そこへ今川軍が入り込み、また牧野が戻り、戸田が入り込んできた、ということだ。今橋城は非常に良い所だったために皆に攻め入れられ、悲惨なことも多かった。

●今川氏の時代—今橋から吉田へ—

今川の軍勢は、一度目は豊橋を落としたが、その後はなかなかうまくいかずにいた。今川義元はなかなかの武将で、重臣の太原崇孚（雪斎）が戸田氏を追い払い、戸田氏は泣く泣く二連木（東田）へ行った。天文15年（1546年）に今川軍が今橋を制圧し、その翌年に牛頭天王（現在の吉田神社）の神輿が作製されている。そのときの棟札に太原崇孚が署名しており、今川義元がスポンサーとなっていたことが分かる。今川氏は今橋を制圧しても地域住民を殺したりはせず、現状維持しながらそこへ入り込んでいった。住民たちも黙ってはおらず、今川氏は嫌われては困るから何かサービスしようとする。そのサービスが神輿を造ることであった。この頃から神社造営ブームが起り、今川氏が入ってきたことによって景気が活性化する。

今橋を攻めたのが天文15年、牛頭天王の神輿ができたのが天文16年（1547年）、牛頭天王の社殿ができたのが天文17年（1548年）、安久美神戸神明社が造られたのが天文19年（1550年）である。天文23年（1554年）には、牛頭天王の天王宮が造営されている。

駿河の今川氏は侵略者だが善政を敷かなくてはならず、それを地域住民がうまく逆手に取って神社の造営を進めている。戦乱の中に立たされながら、吉田は決して衰退しなかった。この頃、今橋から吉田へと名前が変わり、宿場として一層栄えることになる。今川氏は強引な政治をするわけではなく、地域の活性化のために尽力してくれた気がして、少し見直してもいいのではないかと思う。

●酒井忠次と池田照政

ところが桶狭間の戦いで今川義元は討死する。松平元康（徳川家康）が自立して牛久保に攻め入り、今度は豊橋近辺をめぐる今川家と徳川家の戦いが起こる。数年間頑張るが結果的に家康が勝ち、永禄8年（1565年）に吉田城代になったのが酒井忠次である。

家康は吉田城を攻めるが落ちない。賢い家康は力攻めはせず、和睦工作をした。大原肥前守も和睦を受け入れて無血開城するが、そのとき牟呂と千賀という武士に宛てた家康の手紙が残っている。今川氏に仕えていた牟呂と千賀は、今川軍が逃げてしまえば職がなくなってしまう。その手紙には、「同じだけの土地を与えるから吉田城のそばから出て行って欲しい。大原もこのことは了解している。」と書かれていた。開城とはこうしたもので、会社に例えると、今川と徳川という会社が争い徳川が勝った。今川の会社には駿河に帰れる人と帰れない人がいて、社員をどうするかが大問題になる。そこで水面下で話をまとめ、徳川が今川の社員たちを抱え込むことになる。一人も死なない見事な開城で、そういった意味では、無駄な戦いをせず地域の武士たちのこれからを算段した上で身を引いた今川方もいたものではないだろうか。

こうして家康の家臣酒井忠次の時代となり、後に織田信長が吉田に3回来ている。最初は天正2年（1574年）

に吉田城に泊まり、徳川家康と酒井忠次が接待した。信長は家康のために砂金を俵に詰めて持ってきており、それを酒井忠次が城の広間でお披露目している。武田勝頼が滅びた後に信長が来た際にも、吉田に泊まった。東海道にも汚い道はあったが、信長が来ると言った途端、地域の住民が石をよけて道を綺麗にしたという資料も残っている。もう1回は長篠の合戦の時である。

天正3年（1575年）の長篠の戦いの直前、実はもう一つ戦争があった。長篠の戦いは武田勝頼が長篠城を攻めようとして失敗した戦いだが、その前に武田軍は吉田に攻めてきている。二連木で合戦をして、家康は吉田城に籠って武田軍を撃退した。その時の武田軍の資料から、吉田城近辺には2,000人も軍勢がいたことが分かる。

永禄10年（1567年）には、連歌師の里村紹巴が旅の途中に吉田に逗留し、酒井忠次の歓待を受けている。城のある川のそばは景色が良いため、川のそばの風呂に入り、2階で景色を眺めながら酒を飲んで連歌を作った。海が近いので魚がとても美味しかったと書かれている。このように文化人も吉田を訪れ、楽しい時間を過ごしていた。天正14年（1586年）には、家康の妻になる豊臣秀吉の妹（朝日姫）の一行が、浜松への旅の途中に吉田に泊まり、もてなされたという話もある。

吉田は東海道の重要な拠点で、政治を司る人たちや文化人が来ることもあったが、吉田に泊まらないことはないというほど栄えていた。徳川家康が関東に移ると、池田照政（輝政）が吉田城に入る。彼がいたのは10年間だけであったが、家康と石田三成の戦いの際には、家康の味方となって頑張った。吉田に池田照政がいて、西に福島正則、浜松の東の掛川には山内一豊と、東海道の武士たちは全て東軍で家康の味方をする。その中心になったのは、実は吉田であったと思う。当時、清須の武将であった福島正則の家族は、人質として吉田にいた。他の東軍の武士たちの家族も吉田に集められ、人質になっていたという資料がある。たくさんいる東軍の武将の中心が吉田城主の池田照政だったということは、池田の力量だけでなく、吉田という地域の重要性、機能が家康によって認められていたからではないだろうか。

●おわりに

中世の人とはとても逞しい。その中でも一番逞しいのは地域住民かもしれない。地域住民の動きはなかなか資料には出てこないが、神社を造るときには殿様と一緒に馬一頭を寄進する。殿様が代わっても地域住民は代わらず新しい殿様に団体交渉をする。そして決して悪政をしないようにチェックしていたのではないだろうか。

豊橋のまちの面白さは、政治的な意味で城主がいたというだけでなく、地域の住民が昔から豊かで経済力があつたということではないかと思う。そうした富は交通から生まれていて、陸上交通と水上交通の接点として栄えてきたという長い歴史がある。今後もこれを引き継いで、今まで以上に栄えてほしいと願っている。

「未来（あす）の蒲郡に向けて」

蒲郡市長 鈴木 寿明氏



●蒲郡市の現状

子どもの頃から、蒲郡市は「人口8万人のまち」と認識していたが、今年6月1日時点で人口が8万人を割った。コロナ禍で労働条件が過酷となり、いろいろな方が市外に転出される事態を迎え、7月、8月と8万人を切った状態が続いている。蒲郡市の人口は、10年後、20年後と1万人単位で減り、40年後の2060年には6万1千人になると予想されている。この人口減少の状況の中で、まちを活性化させて魅力を高め、皆さんに蒲郡に来ていただけるような政策が必要である。

これまで、地元のグルメとして皆で考えた「ガマゴリうどん」を基に、シティセールスに取り組んできた。併せて映画の誘致活動を行い、幸運なことに今年2月に『ゾッキ』、続いて『空白』と2本の映画を蒲郡で撮影していただいた。これらの映画は来年春に上映を予定しているが、心配なのが新型コロナウイルスの状況である。これからいかに推移していくのかによって、映画によるシティセールスの盛り上げも影響を受けるのではないかと危惧している。

シティセールスをシンプルに考えれば、「まちにあるいろいろな魅力をどのようにPRしていくか」ということである。山と海に囲まれた小さなまち蒲郡の魅力を引き出し、市外の方、日本、そして世界にも発信していきたい。昨年の12月には、議会でシティセールスを認めていただき、シティセールス室を設置して職員が頑張っているところである。

●蒲郡の道路状況

蒲郡は、横に細長いまちである。動脈である名豊道路国道23号蒲郡バイパスの区間で9.1kmがミッシングリンクとなっており、豊川市と歩調を合わせてこの課題に取り組んでいる。また、東三河の各市や産業界の方々にもご協力願って、要望活動も行っている。そのおかげでたくさんの方の予算を付けていただき、何とか用地買収も済み、工事の進捗が待たれる状況である。数カ所のトンネルが既に貫通していて、こういった大きな工事はまだまだあるが、進捗状況は順調であると申し上げておきたい。蒲郡にとって大動脈となる道路の一日でも早い開通を望んでおり、大きなプロジェクトを何とか早期実現したいと

思っている。

また、名豊道路金野IC（仮称）を起点に南に下がる大塚金野線も、まだ計画までには至っていないが、私どもにとって大事な道となる。その先にはラグーナ地区があり、ラグーナシア、ラグーナテンボスの他、トヨタ自動車関わっている海陽学園や研修施設 KIZUNA などがある。最近では、リゾートトラストのホテルも開業した。新しい埋め立て地のラグーナ地区にはまだ未利用地があるため、積極的な利活用を進めている。道路の計画が立ち、森林や近辺の未開発の地域に、企業立地等を計画していきたいと考えている。また、これから先の蒲郡にとって大事な産業となる農業についても、この地区で新しい形の農業というものを考えていけたらと思う。

●東港について

蒲郡は港を大事にしてきており、東港地区でインナーハーバーやポートルネッサンス21計画が立てられたが、残念ながらいずれも実現には至っていない。東港地区は、蒲郡駅から観光地竹島を結ぶ港の地区である。竹島ふ頭は過去に「港オアシス」として国交省から認定をいただき、Sea級グルメ大会を開催した。そうした意味でも、にぎわいのある港をつくらしていきたい。そして単なる観光の目玉となるだけでなく、市民が自然と港に来て憩う地区になって欲しい。観光客と市民が交流できるような地区になることが望ましいと考えている。

東港地区の蒲郡クラシックホテル（旧蒲郡ホテル）や竹島橋は、個人に寄進していただいたものである。滝学園の創始者で尾張のタキヒョー株式会社の瀧信四郎氏が、私財をなげうって竹島から陸まで橋を架け、旧蒲郡ホテルを創業された。蒲郡ホテルの麓にあった常磐館には、有名な文人たちが宿泊しているいろいろな小説を書いており、菊池寛の『火華』といった作品がここから生まれている。そうした歴史が竹島にはある。新しく開発はするけれども、しっかりと歴史を見つめ、歴史を感じるような地区にしていく所存である。今、いろいろな方から意見をいただきながら、計画を作る話し合いを進めている。

竹島橋は昭和7年に架けられた。私が小さい頃は、竹島の氏神様は弁天様で、男女のカップルが来ると嫉妬するため絶対に2人で行ってはいけないという迷信があっ

た。ところが、今いろいろなガイドブックを見ると、縁結びの神様として人気のスポットになっている。カップルを生むまち蒲郡ということで、ご紹介しておきたい。

竹島の商業施設で飲食ができる店は2軒ほどで、今は十分なサービスができない状況となっている。竹島水族館は非常に好調で、たくさんの観光客を呼ぶスポットとして若い館長を中心に頑張っている。この夏は、イチオリシェードという日よけを寄贈していただくなど、地元企業からも応援していただけている水族館は、これからも東港地区の重要な施設だと認識している。

●新型コロナウイルス感染症支援策

現在、新型コロナウイルス感染症の施策をそれぞれのまちで展開しており、蒲郡市では6月議会で計33の施策を提示した。各市町それぞれ独自の状況があるため、蒲郡の状況を踏まえてしっかりと検討し、この先の支援策をパンフレットの形にして皆さまにお渡しした。まだまだコロナ禍は続いており、これだけで十分という訳ではないが、小さな子どもから高齢者に至るまで、バランス良く支援できるような施策を、全庁挙げて各課でしっかりと考えて作ったつもりである。

現在、コロナの状況は、蒲郡市では第2波による感染者が16人となっている。他の市町でも、爆発的に感染者が増えるのではなく、1人ずつ出ているといった状況である。第2波は、重症化の恐れがある高齢者の方は非常に心配ではあるが、軽症の方が多い。軽症の方でも医療機関に入っていただくことが望ましいが、各市の病院はいっぱいである。昨日、豊橋市の佐原市長と豊川市の竹本市長が大村知事と面会し、「東三河地区にも軽症者用の宿泊療養施設を確保して欲しい」と要望を出していただいた。感染者が出ないことを望むが、感染者が出た場合に医療機関がしっかりと医療を提供できるような検査体制や、情報、連絡をしていきたいと思う。

愛知県ともいろいろ情報交換をしており、私どもはより詳細な情報を求めるが、県の情報がなかなか市に入っていないような状況もある。そのような中で、市職員や保健師を中心とした方々にご活躍いただき、次のさらなる感染を防いでいきたい。ご家族を含め、職場や関係者の方に、健康観察または検査を勧める活動も行っている。そうしたコロナ対策はこれからもまだまだ続くが、東三河で連携を図って取り組んでいきたいと思う。

●映画誘致

来春には、『ゾッキ』と『空白』2本の映画が公開される。現在、豊橋市で展開されているNHK朝の連続テレビ小説『エール』は、現在は中止しているが9月から再開される。東三河全体が、こうしたロケ地には本当に適した所である。海でいえば、非常に素晴らしい豊橋の表浜海岸があり、蒲郡の観光地の景観の良い海もある。そして山に行けば、本当に壮大な景色を望むことができる。

東三河のそうした魅力をしっかりPRして、東三河として映画の誘致を実現できれば嬉しい。

観光面については、まだまだ沢山の課題がある。今までの蒲郡の観光というと、蒲郡、三谷、西浦、形原4つの温泉地がある。そして温泉地ごとに観光のグループがあり、これまでは各観光協会が宿泊者数を増やそうとそれぞれ取り組んできた。これからの時代は、全市を挙げて全産業が潤っていく観光にしなければならないと考えており、対話を通じて理解を求めている。これまでの観光協会が一つとなり、さらにあらゆる産業が一つの観光協会としてリスタートできるように、準備を進めているところである。みんなの力で蒲郡のまちを変えていきたい。そのためには、対話と会話を重ねて、皆に理解を求め、未来の蒲郡をつくっていききたいと思う。

3日前には、JCの若い人たちを中心に、市内14箇所でサプライズの花火を上げていただき、それを市民の皆さんがそれぞれの自宅や公園で見えていただいた。「非常に良かった」「元気をもらった」という声がたくさん私にも届いている。そのように若い力が蒲郡にはまだまだあるので、ご期待いただきたい。

今年は、形原温泉あじさい祭りが中止、三谷祭の海中渡御も中止、つつじまつりも中止であった。全てが中止の今年ではあったが、この悔しさ、悲しさを来年以降、コロナ禍が収まったらしっかり反転させて、観光交流立市蒲郡を復活させていきたいという思いを皆さまにお伝えして、私の話を終えたいと思う。

[質問]

連携というキーワードで、今後、東三河をどのようにしていこうかというビジョンがあれば、お聞かせいただきたい。

市長に就任して8カ月経ち、連携の大切さをひしひしと感じている。では、何を連携していくのかと考えた時に、一つは観光である。東三河には、海があり、山がある。蒲郡単体での観光を考えるのではなく、東三河がひとつになると、海から山、山から海といった交流もできる。そのためには道路も必要である。そういった形でインフラの整備も進め、連携組織を図っていきたい。

そしてもう一つは、防災の連携である。2月に蒲郡ふ頭に護衛艦「いずも」が着岸し、給水支援訓練が行われた。今回の訓練は、非常に大きな成果があった。なぜならここに着岸することで、蒲郡から豊川、その先の新城と内陸部へ水、救援物資等を届けることができる。その他にもいろいろな形で連携を図り、防災を考えていく必要があるだろう。情報の交換もしかり、防災訓練も連携して行っていくべきではないかと思っている。

「豊川の『霞堤』^{とよがわ}」

—今も生きる伝統的治水システム—

愛知大学 名誉教授 藤田 佳久氏



●はじめに

河川の堤防は、「全くない」「部分的にある」「全てつながっている」、大きくこの3つに分かれる。例えば、イギリスではあちこちに運河が掘られていて、雨が少ないため堤防はほとんどない。一方、日本は雨が多く堤防がしっかりと造られている。ところがここ一ヵ月だけでも九州、北陸、東北など各地で豪雨が伝えられるなど、近年は雨量が非常に多いため、対応できないような状況が生まれている。

そのような中で、豊川には堤防がないところがたくさんある。「堤防がない」と聞くと、皆さん不思議な顔をされるだろう。豊川の堤防は全くないわけではなく、堤が連続しない「不連続堤」となっている。堤防がうねって見え、ちょうど日本庭園の築山や池の曲線美によく似ていることから「霞」と呼ばれるようになり、明治の半ば頃には霞という言葉が定着した。

豊橋市役所の展望フロアから撮った写真を見ると、正面を流れる豊川の左岸には堤防がない。かつては右岸にも堤防はなく、水位が上がると水が流れ込み、洪水を防ぐ仕組みであった。このような仕組みは豊川流域に9箇所あり、今でも4箇所残っている。

●豊川の水害・洪水の歴史

豊川放水路ができる以前は、豊川流域では各地で水位が上昇し、床下は当たり前、1階の水没はよくあることであった。各集落では水番の人たちが張り付いて見張りをし、豊川の流れの真ん中が盛り上がってくると氾濫の危険があるため、半鐘を鳴らして集落の人たちへ知らせた。堤防が氾濫するわけではなく、堤防の切れたところから水を入れるような仕組みを造っている。

当時は、土壁は造らず板壁で、下の方には重要な物は置かない。「洪水が来るぞ」という時には、はしごを掛けて大事な物を持って2階へ避難し、もっと高くまで水が来る時には吊るしてある船で陸の方へ逃げる。言ってみれば、洪水と共に生きる、洪水文化のようなものが形成されてきた。

現在の三上橋ができる前の橋は、洪水時は水没する「水潜り橋」であった。普段の川の流れより少し高いところにセメントで造られた橋があり、橋の上から簡単に豊川の水を触ることができた。その橋を自転車が通ったりし

て、欄干がないためスリリングなところであった。堤防の上の道路では、洪水の直前に避難させた車がずらっと並ぶ光景が見られた。

15世紀からの水害、洪水の歴史を見ると、大きな洪水だけでも非常にたくさん起きている。特に戦国時代の明応年間、平成と同じように地震や水害が多発した時代で、明応時代の終わり頃に発生した明応地震によって豊川の流れが変わってしまった。このように流路変更が生じる水害も度々発生しており、いかに豊川が氾濫の多いところだったかということが分かる。

地元の人はそれをただ見ていただけではなく、記録に残してきた。明治の最初から昭和5年頃まで、2メートル以上の水位上昇を記録した資料によると、7メートル程水位が上昇し、2階の高さまで水没してしまうことが時々あった。洪水が多発した河川というのが、豊川の一つの大きな特徴である。

当時の記録を分析すると、梅雨時から台風の時期までが最も洪水が多く発生している。高さはどうかというと、2メートル位は当たり前で、上流で300ミリの雨が降ると水位が7メートル程になるといったことも分かる。今はダムができたため状況が違っているが、当時は簡単に下流に洪水が広がった。

対策として、お金がある人は高床式（水屋）にしていた。土盛りをして洪水対策を行っている集落は今でも残っている。最近では、右岸の方は洪水がないため取り壊したところも多く、昔の面影をなくしてしまい残念である。地元の人たちにとっては不便だということだろう。

●豊川下流域の「霞堤」

豊川は、上流まで約77キロとそれほど大きな川ではないが、標高1,000メートル近いところから一気に下ってくる急流である。洪水が多い一方で、今度は雨が降らないと干上がってしまう。これは普通の河川ではあり得ないことだ。普通は自流水とって降った雨が地面に染み込み、雨が降らない時もじわじわと出てくる。ところが豊川にはそれがない。その理由の一つは、地質である。

豊川に沿うように中央構造線が通っており、噴出したマグマが急激に冷やされてできた火山岩と、海の底にたまってできた堆積岩があり、そのちょうど間で違う地質がぶつかっている。ぶつかり合うことで熱が出てどちら

も硬くなり、降った雨が地面に入らずにそのまま下流に流れてしまう。つまり、鉄砲水である。

豊川は、洪水が起こりやすい季節は船が通れるが、干上がってしまう時期もある。川の水量が多い時と少ない時が非常にはっきりしており、これは豊川の大きな個性である。豊川を日本の他の川と一緒に論じることはできない。そこに、なぜ堤防を切っているのかということのヒントがある。

硬い岩石だがやはり土壌の浸食があり、それが途中で堆積して少し高くなる。これは自然堤防と言われる。中世の終わり頃からそのようなところに人々が住み始め、集落が次々にでき上がってきた。自然堤防は少し高く堆積するため、ちょっとした洪水であれば水は来ない。そこを畑にし、外側の低いところを利用して田んぼにするなど、便利な場所であった。上流から土砂が運ばれてきて、肥料が自然と土壌に含まれている。さらに肥料をやるために、山の斜面の方で木を切って草刈りをする。そのことも雨が降った時の保水力を乏しくしていた。

村がたくさんできて、地元の人たちは上流からくる水をどのようにするべきかを考えた。その証拠がないか図面を調べてみると、既に堤防ができていることが分かる。堤防は切れていて、流れてきた水を受け、こちらが破られたらこちらで受けるといった形の堤防で、本流沿いに造られたわけではない。それが古くは中世の終わりにはできていた。

18世紀に入ると、たくさんの堤防ができている。堤防を全て繋げるとどうなるのか地元の人には歴史적으로よく知っているため、隙間を空けて造られている。豊川はどんどん流れを変える。それにうまく応じて堤防が造られている。

堤防を全てつなげずに、上流から来た流れを適当に逃がし、隙間を空けて逆流させて勢いを弱め、水の中に入れる。要するに遊水地である。堤防を造って家を守り、それぞれ遊水地を造ってそこへ水を一旦入れ、本流が下がると水は出ていく。ここには豊かな土壌が運び込まれる。このように自然の恵みをうまく活用する仕組みができた。

明治24年に愛知県が作成した実測図の不連続堤の分布を見ると、まさに霞である。曲線美を描く堤防ができ上がっていた。これは明治になっても変わらず、川の流れが少しずつ動くたびに、堤防が造られたり削られたりしながら、放水路ができるまで堤は生きていた。

●豊川放水路の完成

そうは言っても水害はなくなり、毎回いろいろな被害が出てくる。そこで住民たちが期成同盟をつくって国に陳情した結果、第1級河川を中心とした国の治水対策の最後の方に入れてもらうことができた。それが戦前に豊川放水路という形で具体化してくる。

地元の人も、農地をもっとしっかりさせるためにどう

したら良いのか、全国あちこち回って治水事業を見るが、なかなか良い案が出なかった。そんな中、国の方針で「放水路にする」とあるとき突然決まった。洪水の被害を受けていない下流一帯の人たちには寝耳に水で、地元は猛反対した。しかし戦時体制に入り、何とか豊川の氾濫をなくさなければならないという機運の中、国のためにということで下流の人たちは仕方なくこの政策に従った。

計測をして工事を始めたところで、戦争の激化によって事業は中断してしまう。戦後の食糧難の時代には、農家の主人たちは皆戦争に取られてしまったため、辛うじて農業をやっていた。保証金はもらったけれど、生活のために米づくりをやめるわけにはいかないという状況であった。この窮状を見かねた愛知県議会議員や国会議員が国に働きかけ、国の再保証というカタチを取り付けて説得し、ここに放水路を通すということになり、昭和40年に豊川放水路が完成した。しかし放水路によって水田が全てなくなってしまったという家も10軒近くあった。

放水路ができたことで、安心できるようになった人たちがいる一方で、犠牲を払った人たちがいる。このわだかまりは今でも残っている。犠牲的な精神で戦後苦しんだ下流の人たちのおかげで、特に右岸側が非常に安定したということを上流の人たちに再認識してもらおうというのではないかと思う。

豊川放水路は、日本三大放水路の一つと言われる。放水路で1,800トン流し、分流によって随分救われている。豊川市側は水害もなく、住宅地が次々と増えた。高床式ではなく、道路からそのまま家に入れるようになっている。一方、左岸側は昔どおり変わらず田んぼのまま、水位が上がると水が入ってくる。金沢地区などでは、水位が上がってくると水が中に入ってきて道路も冠水してしまう。この辺りをどうするのかといった議論も出ている。

●今も残る「霞堤」

私が愛知大学に来てから30年目までは、豊川の霞堤に毎年学生をたくさん連れていった。霞堤の中に住んでいる人たちも世代交代し、状況が分からない人も多い。ここにはどのような歴史があるのか。被害を受けただけではなく、積極的にうまく活用してどのように対応していたのか。締め切ると破堤で被害が大きくなるといった時にどうしたらいいのか。そういったことを勉強できるようにすると良いのではないかと思う。

興味を持たれた方は、ぜひ現場を歩いてみていただきたい。全国的にも数少なくなってしまったこの霞を実感していただければと思う。また、豊川の個性、全国の他の河川とは違うというところを実感してもらえるとありがたい。かなり工夫しないと豊川を把握することはできない。その辺のところもご理解いただければと思う。それを踏まえた上で、どうあるべきかを考え直すことが重要である。

「才能を育てる」

NPO法人TTRunners 理事長 仲井 雅弘氏



●はじめに

東京オリンピックが来年に延期となり、アスリートたちは非常に悔しい思いをしながら過ごしている。陸上の長距離競技では、7月の「ホクレン・ディスタンスチャレンジ」から大会が再開され、新記録が続出した。その大会でU20の5,000メートル日本記録を16年ぶりに更新したのは、TTRunners出身の吉居大和選手である。その他にも、高校新記録の更新や自己記録を大幅に更新する選手が続出した。これまで指導者から言われて大事な大会前に練習しすぎていた環境から、自粛期間中に自ら考え、余裕を持って調整をするようになった結果がそのような記録に結び付いたのだろう。ある高校野球の指導者は、自粛期間を経て子どもたちの体がひとまわり大きくなり、打球も飛ぶようになったと言っている。本来ジュニア期のスポーツは、正しい取り組みをすれば人間力を育てる最高のツールとなる。決して無理をさせず、子どもの成長に合わせた指導が必要である。

私の経歴を振り返ると、早稲田大学の競走部で中村清という指導者に会い、「自分自身で徹底的に考える」というその指導の下で、瀬古選手やダグラス・ワキウリなどトップランナーと共に研鑽してきたことは非常に大きな経験であった。実は私の父も箱根駅伝に出場経験があり、親子2代で区間賞を取ったのは私たち親子だけだろう。その父に子どもの頃から「体ができるまでは絶対に無理するな」と言われ、しっかり食べて体をつくるのが大切だと教わった。それがどういう意味だったのか、最近ようやく分かってきた。そして25歳からトヨタ自動車陸上長距離部の選手兼コーチや監督を務めた後、40歳の時に地元豊橋で「NPO法人TTRunners」を設立し、初めてジュニアスポーツに関わることになった。

県大会などでオリンピック選手のように確立されたフォームで走る子どもたちの姿を見て、愕然とした。このようなフォームで走るためにどれほど無理をさせているのかと考えると、そこに気持ち悪さを感じたのだ。中学、高校などの指導者は、自分たちが見ている3年間だけを考えて結果を出そうとする傾向がある。そこに子どもたちへ無理を強いてしまう現状があるのだろう。そのような経験を経て、ジュニアからトップ層までの競技の在り方、アスリートの在り方を考えるきっかけをもらい、そこに疑問を持ちながらジュニアスポーツの活動に取り組んできた。

●トップアスリートの歩み

東京オリンピックのマラソン代表に選ばれた大迫傑選手は、子どもの頃からとにかく強くなりたいと考えていたそうだ。東京出身の彼は、長野県の佐久長聖高等学校に進学した。彼自身が佐久長聖高校の監督としっかり話し合い、部の環境やどのような考えの下で指導をされているのかを確認したうえで進学を決めたそうだ。大学を選ぶ際にも、各大学をいろいろ比較して、自分の将来に最も合っていると判断した早稲田大学に進学した。自分で考え、目標をしっかりと描き、そこに妥協せずに自分自身で進んでいった行動の結果が、大迫傑というトップランナーを生んだのである。

同じく東京オリンピック代表の鈴木亜由子選手のご両親は私もよく知っているが、一流選手が育つ上で最も大事なのはやはり家庭環境である。スポーツとは、オリンピック選手や金メダリストを育てるためにするものではなく、スポーツに真剣に取り組むことで、いろいろなことを学び人間力を高め、競技生活が終わった後の人生をより豊かにするためにするものだと考えている。そういった意味で、鈴木選手をはじめさまざまな選手や親御さんと話をできて、親の考え方や関わり方が重要だと実感している。

2019年12月に開催した東三河ジュニアスポーツ勉強会で、元プロテニスプレーヤー杉山愛さんの母である杉山美沙子さんにご講演いただいた。杉山さんは、順天堂大学の医学博士課程、早稲田大学スポーツ科学研究科修士課程を修められ、指導をしながら、「なぜ一流選手が生まれるのか」を研究されている。杉山愛、石川遼、宮里藍、錦織圭という4人のトップアスリートを例に挙げ、彼らに共通する点として、4人とも最初からプロを目指していたわけではなく、親も彼らがトッププレイヤーになるために子どもの頃から一生懸命取り組んでいたのではないと仰っていた。スポーツに限らずいろいろな分野に触れさせて、その中で子どもがテニスやゴルフが好きになり、そこでトップを目指していこうという考えになったそうだ。大迫選手や鈴木選手も同様であるが、この4人の選手もインタビューで素晴らしい受け答えをされる。彼らがなぜそれができるのかというと、子どもの頃から親子で良好なコミュニケーションがしっかりとれているからだろうと杉山さんは仰っている。

●ジュニアスポーツの現状

本来スポーツは、人間力や生きる力を高める最高のツールである。身体能力はいうまでもなく、子どもたちが自ら取り組み、考え、目標に向かっていく中で、精神力や知的体力もついていく。試合など大きなプレッシャーや緊張もあるが、それを克服していくことでチームワークや協調性も向上する。ただ、日本のジュニアスポーツの現状は、残念ながら結果至上主義、勝つことが全てだという考えが依然として存在する。そして指導者の言うことを聞かないと起用してもらえず、無理をする中で子どもたちの思考力が停止してしまう。本来は子どもたちが考え、自分たちで楽しく取り組み、つくり上げていくべきところにもかかわらず、その発達する部分が抑えられてしまい、体が壊れるのみならず、精神的な部分で抑えられてしまっている場面をさまざまな場所で見てきた。

私が最初から主張しているのは、ジュニアスポーツの専門化が早すぎるという点である。小中学生に全国大会は要らないということだ。日本一を目指すという目標があることで、指導者や親たちが体の成熟していない小中学生に無理をさせ、間違った方向に向かってしまい、悲しい出来事が起こる。「代替アスリート」という表現をしているが、親や指導者が自分のできないことを子どもに託し、子どもをトップにすることで満足するという構図がどうしても存在する。現実には、日本陸連は子どもへの負担を認識し、小中学校の全国大会は縮小する方向に動いている。正しい知識の下に、子どものことを第一に考えて取り組んでいくことが必要である。

●ジュニアスポーツの問題点

子どもの頃に無理をすると、疲労骨折や貧血、無月経、摂食障害、モチベーションの低下などが起こるケースがある。子どもの体は大人の縮小版ではなく、頭が重く、筋力が育っていく前に手足が先に伸びるため、例えばオリンピックと同じ走行フォームを無理やり教えたとしても、一時的には速くなるが、成長するにつれてバランスが崩れてきて、成熟期に本当のパフォーマンスが発揮できない事態につながってしまう。早稲田大学の鳥居俊先生がまとめた中学のサッカーチームの年齢や身長、骨密度などのデータを見ると、同学年でも大きなばらつきが確認できる。つまり、勝利を目指すために学年ごとに割り振って同じトレーニングをさせると、発育状況がこれほど違う中では、成熟していない子どもに無理を強いることになってしまう。

子どもの骨には非常に柔らかい成長軟骨があり、そこが急速に伸びていく。その時に過度なトレーニングをさせると、骨が変形し、疲労骨折や背が伸びなくなるなどの弊害が起こると指摘されている。強い骨をつくることができるのは、最も身長が伸びる年齢で、女子で10.6歳、男子で12.8歳である。その少し後に骨、内臓、筋肉も育つが、それ以前に無理をすると成長が鈍化して

しまう。また、長距離走は体重が軽い方が速いため、女子小学生で速い子は極めて痩身の場合が多く、ほとんどの子は月経が来ていない。月経が来ないとエストロゲンという女性ホルモンが十分に出ないため、初潮が遅ければ遅いほど骨密度が育たなくなる。その結果、トップアスリートでも骨密度が若年女性の7割程しかない選手も多く、疲労骨折を繰り返して現役を引退するケースも多い。将来的に骨粗しょう症や不妊につながる場合もあり、無理なトレーニングは悲劇を生んでいる。ようやくこの問題が日本陸連や医学会などで取り上げられるようになり、現在は、盛んに啓蒙活動がされている。

また、2018年に世界陸上の元代表選手が万引きで逮捕され、その裁判の過程で、選手時代の過度な食事制限からくる摂食障害が原因で窃盗症を発症していたことが判明した。高校駅伝では、全国の子供チームの3、4割が貧血を補うために鉄剤注射を打っており、将来の肝硬変リスクなどが懸念される事例も報告されている。

小学生野球のピッチャーには背が高い子が多く、肘や肩を壊すケースも非常に多い。鳥居先生の研究では、手足から先に伸びる子どもにとっては腕がとて重く、プロのように腕を曲げて投げる筋力がないため、そこで無理やり振らせてしまうことで肘や肩を壊してしまう子が多いと示唆されている。このような点でも、大人が考えていることと、子どもの体の特質との間にかかなりの開きがあることが分かる。ジュニアの指導者はそれぞれの子どもの特質をつかみ、その能力をいかに伸ばしてあげるかという部分をメインに置かなければならない。結果はその後についてくるものだろう。

プロ野球選手やサッカー選手には、早生まれの選手は少ないようだ。4月から始まる日本の学校では、学年ごとに大会があり、そこで勝つために指導者は4月から6月生まれの子を多く起用する傾向があるため、早生まれの子たちはモチベーションが保てずやめてしまうということだ。われわれ指導者が関わり方を慎重に考えていかなければ、若い才能がどこかで消えて行ってしまう事態につながってしまうのではないだろうか。

●若い才能を伸ばすために

本日お話ししたような内容は、勝利至上主義で気合十分な指導者に話しても聞き入れてもらうことは難しい。そこで、当クラブでは、親御さんや地域の方が正しい知識の下に健全で強い子どもたちを育てて行って欲しいという思いから、ジュニアスポーツの勉強会を開催している。子どもたちには速く走ることや遠くへ飛ぶことではなく、スポーツを通して人としてのいろいろな力を伸ばしてもらいたいと考えている。繰り返しになるが、ジュニア期のスポーツは正しい方法と考え方で取り組めば、人間力や才能を育てる最高のツールとなる。その一助となるような取り組みをこれからも続けていきたい。

会員関係者の動静

【顧問】

国土交通省 中部地方整備局
局長 堀田 治氏
(前：勢田昌功氏)

【法人会員】

㈱近畿日本ツーリスト中部 豊橋支店
支店長 北村達哉氏
(前：青木和人氏)

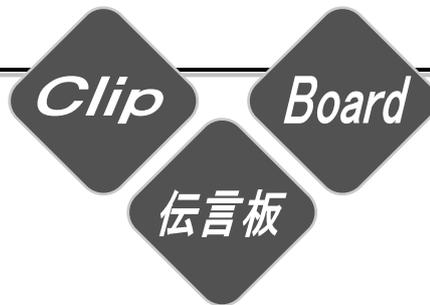
㈱静岡銀行 豊橋支店
支店長 藤森 学氏
(前：飯田昌弘氏)

㈱十六銀行 豊橋支店
支店長 小川哲哉氏
(前：落合宏之氏)

商工中金 豊橋支店
支店長 藤居耕次郎氏
(前：佐々木亮輔氏)

新菱冷熱工業(株) 名古屋支社
執行役員支社長 成沢 悟氏
(前：萩原秀樹氏)

発行日 2020年10月20日
発行所 東三河懇話会
〒440-0888
豊橋市駅前大通3丁目53番地
太陽生命豊橋ビル2階
TEL 0532-55-5141 FAX 0532-56-0981
info@konwakai.jp
https://www.konwakai.jp
編集発行人 東三河懇話会 福田裕之



◇第207回 東三河午さん交流会

日時：令和2年11月6日(金)11:30~13:00
場所：ホテルアークリッシュ豊橋4階「テラスルーム」
講師：(一社)奥三河観光協議会 鈴木真由子氏
テーマ：『奥三河 つなぐ観光を目指して』

◇第433回 東三河産学官交流サロン

日時：令和2年11月18日(水)18:00~20:30
場所：ホテルアークリッシュ豊橋5階「ザ・グレイス」
講師：愛知工科大学 学長 安田孝志氏
テーマ：『三河中央と三河湾の新生「愛知工科大学」』
講師：国土交通省 中部地方整備局
三河港湾事務所長 山口隼人氏
テーマ：『三河港を核とした東三河の経済発展』

◇第208回 東三河午さん交流会

日時：令和2年12月4日(金)11:30~13:00
場所：ホテルアークリッシュ豊橋4階「テラスルーム」
講師：蒲郡市生命の海科学館 館長 山中敦子氏
テーマ：未定

◇第434回 東三河産学官交流サロン

日時：令和2年12月23日(水)18:00~20:30
場所：ホテルアークリッシュ豊橋5階「ザ・グレイス」
講師：豊橋技術科学大学 前学長 大西 隆氏
テーマ：未定

sala サラエナジー株式会社
サラE&L東三河 サラE&L浜松 サラE&L名古屋 サラE&L静岡

誕生

中部ガス株式会社とガステックサービス株式会社は
地域のみなさまの暮らしやビジネスを支える存在であり続けるため、
サラエナジー株式会社として生まれ変わりました。
そして、これまで以上に地域に密着した、きめ細かなサービスをお届けするため、
「サラE&L」各社を設立しました。

sala サラグループ

豊橋名産

サチくわ

TEL(0532)52-7139 FAX(0532)56-2789
Homepage <http://yamasa.chikuwa.co.jp/>